

# アラブの春か、イスラームの目覚めか

## — イランの視点 —

### Arab Spring or Awakening of Islam: Iranian Viewpoints

富田 健次  
Kenji Tomita

キーワード

啓示、理性、タクフィール・サラフィー主義、宗教的民主主義、反シオニズム

#### KEYWORDS

Revelation, Reason, Takfir-Salafism, Religious Democracy, Anti-Zionism

#### 要旨

2010年末チュニジアに始まった「アラブの春」であるが、欧米のこの呼称に対してイランは「イスラームの目覚め」と呼んだ。その背景には、アラブの一連の蜂起はイラン革命を受け継ぐとする視点があった。つまり、イラン革命と次の基本的共通項があると見ていた。1、欧米の政治的支配と専制的で腐敗したその傀儡政権から国民とその尊厳を解放する。2、国民の古来よりの拠り所であるイスラームへの回帰。3、西洋による2世紀に及ぶ支配への抵抗とその象徴であるシオニスト政権との戦い、である。また「アラブの春」はその前哨戦として、2006年のレバノンにおけるヘズボッラーとイスラエルの戦い、ならびに2008年末から09年初めにかけてのガザでの戦いがあったとイランは見た。こうして当初イランが最終的勝者になると目された「アラブの春」であったが、シリアに蜂起が波及したのを転換点に、変調とサウジアラビアを初めとするいわゆる「穏健派」アラブ諸国による反撃が始まった。この反撃の一環(?)としてイスラーム国(IS)の台頭、テロ拡散があるとの見解へとイランの視点は我らを導くのか。

## SUMMARY

Western observers called the Arab uprisings that ignited at the end of 2010 in Tunisia the 'Arab Spring,' but Iran called it the 'Awaking of Islam,' assuming that they were the legacy of the Iranian Revolution while sharing three common fundamental factors: 1. Releasing nations from the domination of Western powers and their corrupted local puppets; 2. Returning nations to Islam, which they traditionally followed; and, 3. Waging a battle of resistance against two centuries of Western domination and its most symbolic burden, i.e., the Zionist agenda. Iran also looked upon Hezbollah's war against Israel in Lebanon (2006), as well as Hamas's war in the Gaza Strip (2008-09), as a prelude to the Arab Spring. At first, Iran was expected to become the final victor of the Arab Spring, but the turning point of the tide came when a series of uprisings arrived in Syria and gave the chance of a counter offensive by the so-called moderate Arab countries such as Saudi Arabia. These Iranian viewpoints may lead us to an understanding that the Islamic State (dā'esh) and the subsequent series of terrorist attacks are part of this counter offensive (?).

「アラブの春」を「イスラームの目覚め」と名付け、また同名でイラン国定高校三年用教科書「イラン現代史」の別冊が2013年度に刊行された<sup>1</sup>。さらには国際政治の評論書が、類似の「イスラームの目覚めと地域変動」と題し、イラン外務省管轄下の中東問題研究所所長、S・ホセイン・ムーサヴィの執筆にて出版された（2013年）<sup>2</sup>。ここでは、欧米諸国での通称「アラブの春」について、この政治変動にイランが期待したこと、またそれへの、当域諸国からの反作用について粗描を試み、この視点からすれば中東のこの政治変動とIS（イスラーム国：ダーエシュ）問題に如何なる特質や側面を見てとれるか探ることにする。その手法であるが、上述のイランの書籍二つを基本資料に、イランが期待したこと、ならびに関係諸国の反作用の粗描線をそれらから抽出する手法を採る。なお、欧米通称の「アラブの春」あるいはイランが言うところの「イスラームの目覚め」は適宜文脈に応じて共に「アラブの民衆蜂起」と称した。なお資料訳文は斜体字または「 」で、訳註は「 」でくくった。

\*\*\*

## I. 教科書「イスラームの目覚め」

まずは、上記の教科書の要旨を紹介する。

当該教科書では「イスラームの目覚め（アラブの春）」を、イスラーム世界と西洋の力関係の逆転とそれによる西洋台頭の時代（17世紀後半）から説き起こし、アラブ世界における「イスラームの目覚め」、インド亜大陸でのそれ、オスマン・トルコのそれについて述べた後、イランのガージャール朝時代、続いてパフラヴィー朝とイラン革命後のホメイニー期のそれに言及する。

なお「イスラームの目覚め」の正確な始点を定めることはたやすくないと断りながらも、次の4つの出来事を契機としたムスリム思想家たちや闘争家たちの反応を始点としてあげる。

- 1) オスマン・トルコにおけるウイーン開城の失敗（1683年）
- 2) イランにおけるゴレスタン条約（1813年）ならびにトルコマンチャーイ条約（1828年）の締結
- 3) ナポレオンのエジプト進駐（1798年）とそれに続く英国による植民地化
- 4) インドにおけるプラッシーの戦い（1757年）でのムスリムたちによる英国への抵抗と敗退<sup>3</sup>

これらの流れにおいてホメイニー指導のイラン・イスラーム革命が及ぼした影響を、次の様に述べる<sup>4</sup>。

「イランの革命勝利は、世界中の人々に向けたメッセージを持ち、ムスリムに対しては特にそうであった。イラン革命の勝利はイスラームに新しい精神を息づかせ、ムスリムたちに自らのアイデンティティと人格を見出させイスラーム統治の樹立を目指す闘いに自信を持たせた」と。

ホメイニー指導のイスラーム革命の勝利がイスラーム世界の「イスラームの目覚め」に及ぼした影響として10項目を挙げるが、ここではその4項目を記す。

- 1) ホメイニーの政策や精神的指導をイスラーム運動勃興の範として示しイスラーム運動の指針に影響を与えたこと
- 6) 宗教の力を世界的規模で盤石にし、すべての民族救済にむけた世界的な範をホメイニーが示したこと
- 8) 権利を剥奪され抑圧された諸民族に向けた世界規模での庇護
- 10) 宗教的民主主義（*Mardom-sālāriye-dīni*）の実践モデル提示

さらに「イスラームの目覚め」の新しい波の時代を代表する論客として、次の三名を挙げる。

- 1) イランのナーイーニー（アーヤトッラー・ハーッジ・ミールザー・ホセイン・

ナーイーニー、[1936年没])：彼はイスラーム法に適った立憲統治制に関する見解を初めて著し、西欧の世俗的民主主義に対して宗教的民主主義を提示した。こうしてイラン立憲革命時にファズロッラー・ヌーリーがイラン憲法第二条補足にて、第一級のモジュタヒド5人から成る立法監視制度を憲法項目に追加し「イスラーム法的立憲制」への道を拓いた。

2) エジプトのハサン・バンナー：彼は西欧文化への従属を無条件に退け、イスラームの原則とコーラン、スンナの蘇生という枠組に立脚し「ムスリム同胞団」運動を設立した。これは今日のスンナ派・イスラーム覚醒の流れにおいて最も純度高き思想運動である。

そして 3) 「イスラーム世界全体における『イスラームの目覚め』200年の歴史においてその転換点をなすのが『ホメイニー』の思想と運動である」として言う。「ヴェラーヤテ・ファギー論に示された彼の総論的見解はコーラン、預言者と聖なる彼の家族のスンナとハディースの確固たる礎の上に立ち、経済的に抑圧され植民地主義文化によって卑しめられ、外来思想の模倣に失望したムスリムの疑問の声に向けた、イスラーム法学、神秘哲学(イルファーン)、神学と哲学、そして可塑弾力的なイジュテハードに支えられた、彼の回答であった」と。さらに「シオニストや欧米、その傀儡のパフラヴィー王制を排し宗教的民主主義を樹立したこと、ペルシア湾岸域の反動勢力がイランに押しつけたイラン・イラク戦争[以降、イ・イ戦争と略す]に対する不撓不屈の対峙、[ソ連軍のアフガニスタン進駐に抗い闘う]アフガーン人ムスリム戦士<sup>5</sup>の保護などは彼の見解の正しさと、ヴェラーヤテ・ファギーならびに宗教的民主主義の持つ真価の徴であった。……」と続け、「後継指導者ハーメネイー期に生じた、共産主義世界の消滅、米国の二度にわたるイラクとの戦役、シオニズム体制に対する[ヘズボッラーによる2006年7月の]レバノンでの33日間の[イスラエル不敗神話を葬り去った対イスラエル]戦争、ガザにおける[イスラエルの数十年来の国際的道義を崩したハマースの]2008年末から翌09年1月18日までの戦争<sup>6</sup>、そしてヘズボッラー、ハマース、イスラーム・ジハード運動による勝利はすべてイランの支援により勝利を手にしており、……イラン東部国境でのアル・カーイダの撃退、米軍のイラク撤兵とその折のイランによるイラク人民保護、そして、イラク最初の民主的統治でのイラク人民の保護、これらは中東域内でイランの影響力を増大させ<sup>7</sup>、今日、如何なる地域問題もイランの支援や関与なく為しえないことは米国が数度にわたり述べ、誰しもが認める見解である<sup>8</sup>と論じる。

教科書「イラン現代史別冊：イスラームの目覚め」の要所を簡潔に紹介したが、ここに確認しておきたい点は、権威主義に対抗して自由と解放を求める意味合いで欧米が「アラブの春」と呼ぶ政治変動を、イラン政府筋は「イスラームの目覚め」と呼ん

だこと、またその背後に、遡ること200年の歴史があるものの、昨今のいわゆる「アラブの春」に繋がる直接的転換点はホメイニーが指導したイラン革命であり、これは転換点であると同時にまた始点でもあり、不撓不屈のイランの姿勢と相俟って従来からの「イスラームの目覚め」に新たな波を引き起こしていると見ていることである。

さらに一点追加すれば、20世紀初頭のイラン立憲革命時に、イスラーム法に悖る議会議法はイスラーム法学者が却下し阻止する権限を有する制度を説いたナーイーニー（1936没）を重要な論客三人の一人として掲げ、西欧における脱宗教の世俗的民主主義に対して一線を画した**宗教的民主主義**を強調している点であろう。イラン現体制内で展開されているイスラーム民主制論の例は註にて紹介する<sup>9</sup>。

次に「アラブの民衆蜂起」の諸側面に関してイランの中東研究所所長の評論集を見る。

## II. イラン中東研究所所長がみる「アラブの民衆蜂起」の前夜

以下は、イランの資料に拠り「アラブの民衆蜂起」とイランの関係について概括的な粗描線を描くという筆者の視点から、イランの中東研究所所長（Seyyed Hosein Mūsāvī）の時事評論集を幾つかの視点から解きほぐして整理再構成したものである。

まず初めに、イラン中東研究所所長がチェユニジアに始まるアラブ民衆蜂起以前の状況について、如何に見ているかに焦点を当てる。

### 「アラブの民衆蜂起」前夜の中東情勢

イスラエルに対し、その不敗神話を葬り去った2006年7月のレバノンでの33日間の対イスラエル戦争。また、イスラエルの数十年來の国際的道義を崩した2008年末から09年初めのパレスチナ人民によるガザでの対イスラエル戦争、これらは先に紹介した教科書も同じだが、イラン中東研究所所長（以後、イラン観測筋と記す）もこの二つの戦いを画期的と評価し、その波紋を次のように述べる。

「レバノンとガザの戦争で、イランはレバノンとパレスチナ人民側に立つと公式に宣言した。一方のイスラエルはガザの戦争はイランの影響力拡大に対する闘いと呼んだ。イスラエルのガザ戦争とそこでの非道ぶりは中東以外でも波紋を惹起し、トルコも従来の立場を変えパレスチナ人民への支持に立ちイスラエルに抗議をした。インドネシアから南米に広がる反イスラエルの声やヴェネズエラのイスラエル大使追放という事態が展開した」<sup>10</sup>。

「当然、それとともにアラブの穏健派諸国と強硬派の間で軋轢が強まり、これを受けカタールがアラブ首脳特別会議を呼びかけたもののエジプト、サウジ、ヨルダンなど主要国の参加はなく失敗した。アラブの民衆はかかる状況に失望し、期せずして非

アラブのイランやトルコに期待の目を向ける反面、アラブ穏健派諸国首脳の見方は揺るいだ<sup>11</sup>。

「アラブ諸国とイランの関係は概して1979年のイラン革命以来、一触即発の緊張状態にあり、加えて1980年のイラン・イラク戦争の勃発もあった。とはいえ、アラブにもイランにとって戦略的盟邦と言える国、シリアがあった。現在のアラブ世界は二つに分けられる。穏健派（エジプト・サウジ・ヨルダン）と過激派（シリア）である。これは米国のコンドリーザ・ライス国務長官〔在職2003-09年〕の命名で、現地由来では無い。この分類が出現したのはイスラエルが手痛い打撃を受けた2006年のレバノン戦争を契機とした。この戦いで米国は『穏健派』や『過激派』という語を以前に増して頻繁に使い出した<sup>12</sup>。

「イスラエルは報復として2008年暮れから翌2009年初の2週間にかけて、ガザにおけるハマース運動とパレスチナ人民への〔報復〕攻撃にて帳尻を合わせんとしたが、イスラエルの戦果は芳しくなかった。これ以降、イランは過激派の筆頭に登るようになった。アラブ穏健派と過激派の両陣営間の軋轢は募ったが、リアドでのアラブ四者和平会議（同年4月）も成果はなかった。見解の違いの根元はイランについて、アラブ諸国が如何に対応するかであった。2009年6月、エジプトはヘズボラーを当域の〔危険な〕冒険主義者と非難し、またエジプト国内でその細胞が発見されたことイランにこれを託け、イラン・エジプト両国間関係は緊張した。エジプトはガザ戦争でイスラエル側に立ち非難したが、イランの危険性を煽る事はパレスチナ問題から目をそらす事に他ならなかった<sup>13</sup>。

「かつてエジプトのサダト大統領はイラン革命時に国外脱出したイラン国王のエジプト入国を受け入れ、並行してイスラエルと和平を行った。一方の革命イランはその4月にテヘランのイスラエル外交官を追放し接収した大使館を PLO に渡し、またイランの説く革命輸出がアラブ諸国の懸念や恐怖心を煽った。エジプトはイスラエルと行った単独和平のゆえにアラブ世界で孤立したが、〔イランの革命輸出に対して抱く〕ペルシア湾岸アラブ諸国の恐怖心をテコにこの孤立を打開せんとした。つまりエジプトはイ・イ戦争でサウジなど湾岸アラブ諸国と共にイラクを支援することで孤立脱却の機を得た。アラブ湾岸諸国がイラク財政を支援すれば、エジプトがイラクを軍事的知識や経験と実践面で支援した。〔1988年のイ・イ戦争停戦後〕イラクがクウェートに〔1990年8月に〕侵攻すると、エジプトは直ちにクウェート支持にまわった。湾岸アラブ諸国、とくにクウェートはイ・イ戦争でのイラク支援の非を認めてイランに反省の意を伝え、エジプトもイランとの関係改善の意向を示したが、2003年、米軍によるイラク占領により秩序再編の更なる波が押し寄せた<sup>14</sup>。

「アラブ穏健派諸国は、イ・イ戦争開戦時には米国と共にイラクを支援したが、

2003年の米国主導のイラク戦争時には、反サッダーム・フサインに転じ米国側に付いた。これから言える事は、アラブ穏健派諸国の姿勢はアラブ民族の利益に添うのではなく、米国の当域戦略に追随する姿勢だと言う事である。ところが、米国がオバマ政権となってイランとの対話を口にしだしたとき [2009年] から、アラブ穏健派諸国はイランが影響力拡大を図っているとしてアラブ諸国で故意に暴動を起こすなどにて策動し、米国のイラン接近を牽制しだした。アラブ穏健派諸国はこの数年イランが中東、とくにイラク、レバノン、パレスチナ問題に介入していると非難して米国の論調に影響力行使し、また、自らをナショナリスト [アラブ民族主義者] と称している。何よりも興味深いのはレバノンの [2006年ヘズボラーの] 目覚ましき勝利やパレスチナ民衆の [08年末-09年初、ガザで] の戦いをアラブ穏健派諸国が [危険な] 冒険主義と呼び、イランに関連付けて非難していることである」<sup>15</sup>。

また、イラン外交における宗教的要素や対米・対イスラエル姿勢と言った枢要な面に触れ次のように (とくに下線部のごとく) 言う。「革命前までイランは、イスラエル問題においてアラブ寄りでないとは非難されていた。しかし、イラン革命後は中東和平志向のアラブ穏健派寄りでないとは非難される。とくにこの30年、エジプトからはそう非難されてきた。イランと米国間の見解の深い相違は、このイスラエル問題にある。イランは宗教的使命の枠組 [宗教的使命の説明例を註に付す]<sup>16</sup>、また、自らの国民と中東地域の枠組で、シオニスト体制 [イスラエル] の存在が当域全体にとって危険であると見なし、反シオニスト体制の側に立つことは当然であり、また、イランが中東地域民衆の理想を支持し保護する路線を採って多大な出費を担っていることは誰の目にも明らかなことである」。

そして、イスラームの団結に悖り、その内部で宗派抗争を煽っているのはサウジであると難じ、アラブ民衆を裏切ってイスラエルと手を組むと述べる。

「イスラーム内部の宗派抗争に問題をすり替えてシーア・スンナ派の相違をあげつらい [宗派] 抗争を煽っても、物事の真相は変わらない。2006年のレバノン戦争で [レバノン・シーア派のイスラーム主義運動] ヘズボラーのハサン・ナスロラーがアラブの英雄になったがこれはシーア派・非シーア派の別とは関係ない。ガザにおける [スンナ派] パレスチナ人達のイスラーム聖戦やハマース運動による果敢な抵抗への賞賛や支持にイラン人はスンナ・シーアの区別をしただろうか?!」<sup>17</sup>と。

「米大統領オバマはその政権発足直後にイランとの関係に新たなページを開くと述べたが、これはアラブ穏健派に恐怖心を抱かせた。米国がイラク戦争にてサッダーム・フサインを倒し、イラクを金盆に載せイランへの供物にした、とサウジは不満のべ、この米国に同調することは、如何なる形であっても当域の勢力均衡を危機に晒すと言うほどにアラブ穏健派の恐怖感は強い。……その結果としてサウジが、イスラ

エルに接近するという代償を払ってでもシオニスト・ロビーからの便宜供与を入手し、米国のイラン政策の変更を阻止せんとしているのは明らか」（この執筆時点は2009年5月）<sup>18</sup>と。また、

「……たとえ米国がイランとの関係改善を求めても、イランが米国の歓心を買うために当域の諸国民の理想を売り渡すことはないことをアラブ穏健派諸国は知らない」<sup>19</sup>と。

### Ⅲ. 「アラブの春」か「イスラームの目覚め」か（中東研究所所長の見解）

「20世紀前半の数十年、中東で渦巻いたアラブ民族主義国家の形成期には、軍人が重要な役割を果たし、その多くは東西陣営の冷戦で事実上、東側に属した。エジプト、リビア、アルジェリア、シリア、イラク、イエメンなどである。しかし、一部のアラブ国は中道を、もしくは冷戦末期に西側に転じた。その東西陣営のいずれにあっても、イスラーム主義者に敵対し弾圧するのがアラブ民族主義政府の共通点であった。ソ連がこれを支援し、ソ連崩壊後は米国が支援した」<sup>20</sup>。

ところがアラブ民衆蜂起後のチュニジア、エジプト等の選挙でイスラーム主義者が勝利し、またモロッコやヨルダンでも同勢力がわずかながら伸張すると、イスラーム主義者たちが他の追随を許さない社会的吸引力をもつ事実を明らかにしたとイラン観測筋は評した。

「エジプト革命後初の選挙となった人民議会選挙<sup>21</sup>がとくにこれを示しており、『イスラームの目覚め』と当初から言ってきたイランの分析が正しいことを示した」<sup>22</sup>と。

しかし、世界や中東の一部の国はイスラーム主義の台頭に懸念を強めた。「まずイスラエルが危惧を示し、また米国もエジプトとイスラエル間の和平を定めたキャンプ・デービッド体制の維持を図るべく、ムスリム同胞団の自由公正党代表との会談のためにジョン・ケリー上院議員〔当時〕をカイロに派遣し、既存の国際諸協定を護持するとの返答をエジプト側から取り付けた」<sup>23</sup>。当時、イスラーム主義の台頭の動きに応じて、ムスリム同胞団と友好関係を持つトルコの公正発展党政府がアラブの春で揺れる中東諸国への新たな範としての役割を果たすことで、米国とトルコが暗黙の合意に至ったとする欧米報道が見られ<sup>24</sup>、関連してイラン観測筋の次の見解もあった。「ムスリム同胞団がカイロのタハリール広場から指令し平和裡に勝利に向け歩を進めると情勢を読み、米国を初めとする欧米諸国はムスリム同胞団との接触を優先した。その結果、ムスリム同胞団が友好的関係をもつトルコの公正発展党政府の政策に範を求めると確信すると、米国はムスリム同胞団に対する従来の見方を変えた」<sup>25</sup>。「こうして、トルコはエジプトやヨルダン、シリアの穏健なイスラーム主義者（とくにムスリム同胞団）との対話役を担い、サウジは〔アル・カーイダに連ながる〕過激なイス



ラーム主義者（ジハード・サラフィー主義者）<sup>26</sup>との対話役を担ったと言える。サウジがシリア、リビア、エジプトにおいて期待された役割は同じ枠組で米国と協調することと見られたが、トルコと異なってサウジは、バハレーンの民衆や反政府集団との仲介役を対話により果たすのではなく、GCCの「半島の楯軍」を派遣しバハレーン政府の民衆弾圧に加担した。バハレーンの民衆蜂起はイランに煽られた一部集団の仕業というのがサウジによる口実であった<sup>27</sup>と。

#### IV. シリアと国際政治の渦（中東研究所所長の見解に基づいて）

アラブの民衆蜂起の波がシリアに達すると周辺諸国ならびに米国の反応はひときわ際立つ形を取った。

「チュニジアとエジプトが政治的急変を始めるとアラブ穏健派諸国はイランが最終的勝者になるとの見方で応じ、西欧命名の『アラブの春』即ち権威主義専制体制に抗う民主的運動として一連の民衆蜂起を描き、イラン・イスラーム革命との違いを強調せんとしたが、このアラブ穏健派諸国に、化石のごとく凝固したスルタン制のサウジや非民主的な共和制のイエメンもいた<sup>28</sup>。

米国を初めとする欧米諸国は、チュニジア・エジプトの政治変動に衝撃を受け、イランがこれらを『イスラームの目覚め』として歓迎姿勢を採るとイランは信用できないと非難した。米国は対イスラエル抵抗軸諸国に対抗し、アラブ穏健派諸国政権を創出し支援して来たものの、これら政権が善後策を講じる暇もなく崩壊するのではないかと懸念していた」。

「しかし、イランが促進していた対イスラエル抵抗軸にとり枢要かつイランの戦略的盟邦でもあるシリアに、民衆蜂起の波が及ぶと（2011年4月）、[米国やイスラエルの]欧米諸国と[サウジやヨルダンなどの]アラブ穏健派諸国は、シリアに砲火を集中することでアラブ穏健派諸国が蒙った打撃[チュニジアとエジプトの政変]を埋め合わせる、好機到来と見た<sup>29</sup>。

「チュニジア・エジプト両国の政治変動とシリアのそれの間には本質的違いがあり、この地域のムスリム諸国民の理想や運命に[シリアの]それは直結する。チュニジア・エジプト両国の場合は国外からの指示への従属性が薄い民衆蜂起であった。しかし、シリアの内乱はかかる国内ローカル色はなく、シリア抵抗国民評議会はリビアの例に倣い国外との繋がりを持ち干渉を受けていた<sup>30</sup>。アサド政権退陣を必然視してアラブ連盟や米欧は声を高く挙げ、シリアに介入するシナリオを様々に検討した<sup>31</sup>と。

「シリアはこうして二つの国際的戦略の思惑がぶつかり渦巻く舞台としてその様相を強めた。一方は、米国と中東のその同盟国による世界戦略であり、他方はロシア、

中国、インド [ママ]、そしてイラン指導の抵抗軸に忠実な勢力 [例えばヘズボラー] からなるブロックによる世界戦略である」<sup>32</sup>と。

そして同イラン観測筋は、シリア問題に関する結論を次の様に纏める。即ち、「シリア内乱は事前に西側諸国の中枢において練られたシナリオに基づき、サウジを先頭にしたアラブ穏健派諸国が財政支援と同調、[GCC やアラブ連盟と言った] 地域的纏いを用いて、彼らが失ったチュニジアとエジプトの埋め合わせを狙ったものである」<sup>33</sup>、と。

加えて次の諸点も言及する。即ち「米国はバハレーンの民衆蜂起に関して、その専制的政治体制という問題にも拘わらず、在バハレーン米軍基地問題が絡むゆえに、民衆による反政府抗議に米国は反対している。この米国の [他国の人民の声よりも自国の戦略面優先の] 政策と同じ次元で、イランもシリアの内乱に関しては、ソ連に類する半世紀前の政党イデオロギー色を残す閉鎖的な警察国家シリアが民主的か専制的かはひとまず不問に付し」<sup>34</sup>、「この国が二つの [陣営間の] 戦略的争いに拘わるがゆえに、シリア人民による反政府抗議には反対している」<sup>35</sup>と。イラン観測筋のこのシリア観は、シリアがイランと宗派的に同じシーア派政権の権威主義的体制であるとして、スンナ派・シーア派の宗派抗争の側面を強調するサウジの見方と形・質の面で異なる。

またもう一点、「シリア問題に関して、サウジはじめ湾岸アラブ諸国が民主制擁護の立場を主張するが、サウジの国自身が後進的かつ閉鎖、専制的であり、それを口にする資格は世界で最後尾に立つ」<sup>36</sup>と。

## V. 辺諸国の反応 — 啓示と理性の相克 —

この章では、まず周辺諸国の反応、つまり、サウジなどペルシア湾岸産油国とイランの関係に絡む側面にイラン以外の別資料 (イスラエル関係者による分析など)<sup>37</sup>も援用しつつアプローチしたあと、現代イスラームにおける啓示と理性の相克について論を付す。

\*\*\*

イラン革命直後のサウジ東部州油田地帯のシーア派住民による騒擾、メッカ巡礼時のイラン人によるデモとサウジ官憲との衝突・摩擦などによりサウジとイランは緊張したが、イ・イ戦争の停戦 (1988年) から、1990年代にかけての約10年は雪解けの友好的関係が生じた<sup>38</sup>。しかしアフマディネジャードがイラン大統領に就任し (2005-13年)、さらに2010年末「アラブの民衆蜂起」が始まり、バハレーンとシリアにも波及すると両国関係は再び緊張した。この間、イラクでは米国主導のイラク戦争 (2003

年)によりイラク大統領サッダーム・フサインが倒され、その後に成立した新生イラクは、米国主導下で導入された民主制によりイラク人口の6割方をしめるシーア派教徒が主導的位置に立つ体制となり、同じシーア派のイランの影響力が強まろうとしていた。とくに、2011年バハレーンのシーア派住民による民衆蜂起時(2011年2-3月)、新生イラクのマリーキー政権がバハレーンのシーア派住民を支持し、OPECでもイランの石油政策に加担すると、サウジはこれらをイラクがイランの衛星国になった証と見た<sup>39</sup>。サウジはイ・イ戦争(1980-88)時にイラクに莫大な財政支援を行ったにもかかわらず、米軍がその政権を打倒した後にイラクで展開した状況はかかる努力と釣り合わないとの不満をサウジは抱く、とイラン観測筋は見る<sup>40</sup>。

「アラブの春」により中東情勢は2010年末から流動化がすでに始まっていたが、2011年末に折しもイラクから米軍が撤兵する予定だったことが、否応なくその緊張度を募らせた。米国のイラク撤兵後の空白をイランが埋め、ペルシア湾岸からイラン、イラク、シリア、レバノンに繋がる三日月地帯にイランあるいはシーア派の勢力圏が形成されんとしていると見てサウジは危機感を抱いた。サウジは米軍撤退に反対したが、イラクは米軍の撤兵計画を予定通りに進めた。

サウジは長年のイランの戦略的盟邦だったシリアのアサド政権打倒の方針を採り、GCC諸国とりわけカタールと手を組み<sup>41</sup>、アラブ連盟にも働きかけた。これはサウジの戦略的盟邦だったイラクがイランの衛星国と化した損失を埋め合わせる策とイラン観測筋は見た<sup>42</sup>。

こうして、米・イスラエルによるシオニズム拡張主義に対峙する「抵抗枢軸」を、イラン、シリア、レバノンのヘズボッラー、ロシア、中国からなるブロックがつくり、そこでイランがイスラエル問題を前面に押し出すことにより、イスラーム全体の団結を説けば、サウジは対抗して、カタールとともにイラン問題でイスラエルと陰に陽に交渉をしつつ、イスラーム内のスンナ派・シーア派という宗派の別の抗争意識を煽り、宗派を前面に打ち出してサウジからカタール・湾岸諸国、ヨルダン、そしてトルコを加え、英米ならびにイスラエルへと繋がる「穏健派諸国ブロック」の形成を2011年夏から強化した<sup>43</sup>。アサド政権によるシリア市民弾圧を非難し、アサド退陣キャンペーンを推進しつつである。

さらに2011年6月、トルコがシリア・アサド政権に対してその仇敵(シリア内の)ムスリム同胞団との和解を要求し、2ヶ月後にアサド政権が拒否すると(同8月)、トルコは反アサド政権勢力の支援へと舵を大きく切った<sup>44</sup>。

既述したが、トルコの公正発展党がムスリム同胞団と友好協力関係にあった故に、シリア・エジプト・ヨルダン諸政府と穏健派イスラーム主義者(各国ムスリム同胞団)との間の仲介役を、トルコが米国との協調枠組の下で担うことになったと言える

とイラン観測筋が述べた。トルコがムスリム同胞団との和解をアサド政権に要請した背景には、かかる事情との絡みが窺える。

シリア・アサド政権への退陣圧力はこれと期を一にして一気に高まった。アル・ジャジーラの報道姿勢に変化が生じ、またアラブ連盟閣僚会議の議長国に突如として就いたカタールはサウジと共にシリアのアラブ連盟資格を一次停止して経済政治制裁をシリアに科した<sup>45</sup>。サウジはあくまでアサド政権が抑圧するシリア市民の庇護を主張した。しかし、自国内でシーア派教徒を抑圧するサウジが、シリアでの被抑圧市民の庇護を大義名分に反政府勢力を支援するのは大義上ジレンマがある、とイスラエル系観測筋も指摘する<sup>46</sup>。サウジの真意を探るには、大義名分でなく実際行動に見ることが求められ、対イラン対抗策が真意とすれば矛盾の大半は霧消する<sup>47</sup>。

2012年8月ならびに2013年3月、オバマ米大統領が設定した化学兵器使用に関するレッドラインをアサド政権が越えたとしてシリアへの軍事懲罰行動を米国にサウジほかアラブ穏健派諸国が求めたが、米国の反応は鈍かった。2013年8月21日、化学兵器によって市民に犠牲者が出たことにより米国はシリアに対する軍事懲罰の構えを見せたが<sup>48</sup>、シリアがロシアとイランからの助言に基づき（ロシアが安保理常任理事国として安保理に、イランが近隣友好国としてシリアに働きかける役割分担）、化学兵器廃棄を2014年6月末までに行うとの表明でもって対応した。米国はこれに応じて軍事行動の構えを解く。この米国の動きに不満を募らせたサウジや湾岸アラブ諸国（クウェート・UAE）は、それぞれが個別に、異なったシリア反政府勢力への軍事・資金的支援を競って増強し、シリア反政府勢力の過激化を促進させた。こうしてその所業にワッハブ主義的特徴<sup>49</sup>を色濃く持った「イスラーム国」の樹立宣言が為されたのは奇しくもアサド政権による化学兵器自主処分の期限2014年6月末であった。

### 現代イスラームにおける啓示と理性の相克

サウジの動きを総ずるに、とイラン観測筋は次の様に言う。「中東の革命の波がアラビア半島に接近するのをサウジはレッドラインと見なし、バハレーンの民衆蜂起を軍事的に鎮圧したがこれは、サウジがイスラームの目覚めからもアラブの春からも利を得ていないことを示す<sup>50</sup>と。つまり、欧米が期待する民主化運動としての「アラブの春」にも、またイランの説く「イスラームの目覚め」にも [つまり、宗派の別を越えたイスラーム全体の団結に立ち、欧米覇権国が突きつけたシオニスト政権やそれに宥和的傀儡政権によって構造的に抑圧されるアラブ民衆の解放を支持する立場にも] サウジは関心や利害いずれも持っていない、と。

もっとも、サウジの拠って立つワッハブ主義は広義のサラフィー主義の一つとされており（註の**サラフィー主義**参照<sup>51</sup>）、その中でもとりわけサウジ中枢に繋がる宗

教界長老の多くが採る伝統的サラフィー主義（purist）の立場は、「ムスリムの宗旨替えを狙ってイスラーム破壊の陰謀を巡らすイスラーム永遠の敵が異教徒たちである」と、コーランの一節（3章118節）<sup>52</sup>に拠って断じ、彼らの手段である西欧的価値や営為、論理体系を用いて宗教について論じることを禁じる。

大々的にイランが用い、拙論の標題にも使った「イスラームの目覚め」も、ヒジュラ暦今世紀（つまり15世紀、その元年はイラン革命の年でもあった1979年）以降に使われ出した西欧からの借用語であると彼らは難じて、その使用を単に批判するのみならず、使う者は西欧の思考に依拠した敵の不健全な道具であると断罪し、すべての知識はイスラームに内在する故に、異教徒との対話自体が無意味と説く<sup>53</sup>。

一方、イランのシーア派教義の教科書はこのワッハーブ主義の考えとは対照的に次の様に言う。

「もし、理性を人間生活という船の船長とするならば、啓示からの教えは方向を定める羅針盤であり、この二つが相俟って生きる目的に向け進むことを可能にする。従って啓示は、人間の理性も知性も全く無力か、もしくは総論的な導きと正しい方向付けを必要とする場合かの何れかの「場合のための」教えである。[それらの場合]でなければ、人間の理性と思考力が単独で問題解決の結び目を解くことができ、人間が[この]内なる能力を使って自らの問題を解決し、[生きる目的である自らの]完全さに向け歩を進める[引用元の前後の文脈から「完全さ」とは神の謂い、それに近づく努力をする]ことができるようにと、たとえば、多種多様な科学や技術の習得や治療その他個人や社会生活に関するあまたの問題を治めることなど、啓示が人間に己れの「為すべき」責務を気付かせている場合である。したがって預言者たちは、啓示の導きの光のもとで、諸真理を知る道での歩みを早めるよう、人間の思慮の道の上で灯明をかざすという義務を担う」<sup>54</sup>と、シーア派は啓示と理性は相補すとしながらも、理性に比重を置き活用を重視する立場を説く。

ここにはイランの拠って立つ十二イマーム・シーア派とサウジのワッハーブ主義の間に深い溝が単に宗教的儀礼のみならず教義面にもあることが見て取れる。聖者・イマームへの尊崇と廟参拝、[死者である]彼らに神へのとりなしを求める祈願といったシーア派の宗教儀礼をワッハーブ主義が多神崇拜行為として非難することのみならず、古典ギリシャ思想という外来思想の影響を受けたイスラーム神学（ムウタズィラ派）の影響をその本質にうけ継ぐとされ<sup>55</sup>、理性活用を重視する十二イマーム・シーア派、それに対して、理性活用を排し啓示つまりコーランとハディースを、その字面通りに受け取ることを説くワッハーブ主義の採る姿勢の間に横たわる溝である。イランとサウジ間の緊張と確執という政治現象には、現代イスラームにおける**啓示**と**理性**という宗教的問題の側面がある。

## 結語

上述した（教科書と中東研究所所長の評論集を柱とする）イランの視線から見た「アラブの民衆蜂起」の前夜からシリアと国際政治の渦までの過程を、粗描の形で次に纏める。

\*\*\*

米欧が独裁者や強権者に対して自由と解放を求める意味合いで「アラブの春」と呼ぶアラブ圏の政治運動を、イランは「イスラームの目覚め」と呼んだ。その背後には近代西欧との相克を背景にした2世紀に及ぶ「イスラームの目覚め」の歴史があるものの、昨今の「アラブの春」もしくは「アラブの民衆蜂起」はホメイニー指導のイラン革命が、その転換点であり始点でもあるところの「イスラームの目覚め」であるとする。つまりそれはイラン革命の継続かつ延長との位置づけである。また、その特徴は、民衆的イスラームであり、また驕り高ぶる者〔現世的覇者：米国やその傀儡の謂い〕との闘いと見ている。

\*\*\*

2003年のイラク戦争により、サッダーム・フサイン政権が米軍によって倒されたことをサウジなどアラブ穏健派諸国は、米国が金盆にイラクを載せてイランへの供物にしたと不満を抱いた。さらに2009年1月にオバマ米政権が発足しイランとの関係改善の姿勢を見せ始めると、これを阻止すべく彼らは陰に陽に画策を始め、イスラエルとも協調する動きをとりだした。

かたや、2006年のレバノンにおけるヘズボッラーとイスラエルとの戦い、ならびに2008年末-09年初めにかけてのガザでの戦いでイスラエルと闘うヘズボッラー、ハマース運動やイスラミック・ジハードがイランの支援によって善戦し、イスラエル不敗神話を崩し、さらに数十年来、イスラエルを支えてきた国際世論の風向きにも変化の兆しをもたらした。こうして、イスラエルに宥和的姿勢の「アラブ穏健派」政権に対してアラブ民衆が失望感をくすぶらせ、イランの説くイスラーム回帰とイスラエル抵抗への期待が、「アラブの春」こと「アラブの民衆蜂起」に先行する形で醸成されつつあった。

この状況下で生じたチュニジア青年の抗議を契機にアラブに民衆蜂起が生じると、イラン主導の対イスラエル抵抗枢軸が最終的勝者になると見る（イスラエルや米国からすれば肯んじ得ない）気運が生じた。

こうしてアラブの民衆蜂起と革命、これに続くチュニジア、エジプトの選挙におけ

るイスラーム主義者の勝利、またモロッコとヨルダンでの若干の勢力伸長は、イスラーム主義者たちが他の追随を許さない社会的吸引力を持つことを明らかにしたとイランは期待を寄せた。

ところが、シリアに民衆蜂起が波及（2011年4月）すると、イランが最終勝者になると見られた形勢を逆転させる転機が生じ、シリアは国際政治の渦の中心と化す。このシリアでの動乱は、西側諸国の中枢において事前に練られたシナリオに基き、サウジを先頭にしたアラブ穏健派諸国が、資金支援と同調、[GCC やアラブ連盟と言った] 地域機構の纏いを用いて、アラブ穏健派が失ったチュニジアとエジプトの埋め合わせを狙ったものであるとイランの観測筋は見た。

サウジを初めとするアラブ穏健派諸国は、シリアのアサド政権が自国の反政府勢力との対話を求めても、国内社会の改善よりもアサド政権の退陣が先決との外交策に拘り、化学兵器使用問題で NATO（米軍）による軍事力行使に期待を寄せた。これが不発に終わると、サウジの他、クウェート・UAE など湾岸アラブ諸国が個別に反アサド政権勢力への軍事・資金面の支援を競って増強し、過激化を促進させた結果、IS（イスラーム国）が樹立宣言するに至った（2014年6月末）。

次は、以上の考察から看取し得る「アラブの民衆蜂起」の側面もしくは特徴二点である。

第一点は、アラブ穏健派諸国が対米協調追随策によりイスラエルに宥和策をとるとしても、政府レベルはともかくとして民衆レベルでの話は別であり、そこに政府と民衆との乖離とギャップが生じ得る。イスラエルと善戦したヘズボッラーのナスロッラー事務局長はアラブの英雄扱いされたが、他方、エジプト政府はヘズボッラーを危険な冒険主義者として非難したとイラン観測筋が言うが、これはかかるギャップの存在を言わんとするものである。それは、イスラエル問題によって民衆に対する権威主義的要素（民主化阻害要素）が構造的に政府に付与される（もしくは、その側面を強める）ことを意味する<sup>56</sup>。この構造はまた、革命前の王政イランにも共通する。

第二に、冒頭の教科書紹介において「アラブの春」をイランはホメイニー指導のイラン革命の延長線上の継続としてその先行きに期待を寄せた旨を記した。

この点をより鮮明に打ち出しているのが、ハーメネイーの2011年9月17日「イスラームの目覚め国際会議」でのスピーチである<sup>57</sup>。彼はそこで次の旨を述べる。「エジプトの革命は、イランのイスラーム革命を受け繋ぐもので、チュニジア、イエメン、リビア、バハレーンも同じである。[イラン革命と] これらに共通する特徴は、1) 欧米の政治的支配と腐敗した [その傀儡である] 専制的支配者によって蹂躪された国民の尊厳と栄誉の回復。2) 古来よりの国民の拠り所であるイスラームへの回帰。3) この二世紀にわたる欧米の支配と影響力への抵抗。そして彼らが突きつけた

シオニスト政権 [イスラエル] との闘争である」と。

イランの教科書ならびに中東研究所所長の評論とハーメネイーの言説の分析から言えること、それは、米欧は中東アラブ諸国が持つ権威主義的側面を批判し民主化を期待するものの、当の米欧が (冷戦構造もあって) 肩入れしてきたシオニスト政権の存在が、それに協調し宥和する権威主義的体制を構造的に強制することが民主化阻害の要因になっている、という矛盾を突き、問題視しているという側面である。「アラブの春」を「イスラームの目覚め」とハーメネイーが称しながら単にイスラームの回帰だけでなく民主制も共に強調するのは故なしと言えない。

しかし、イラン革命を受け繋ぐと期待されたエジプトのムルシー政権は、その後の展開で2013年7月クーデターにより失脚し、サウジがこれを歓迎した。その傍らで、シリアのアサド政権の存続問題を巡って、イランとサウジとの激しい確執がなお続く<sup>58</sup>。イランがその革命を受け繋ぐとして期待を寄せた「イスラームの目覚め」であるが、その帰趨はなお予断が許されていない。

他方で、2015年7月にイランの核開発問題交渉で実質的にイランと米国が合意に至ったことは、サウジとイランという二つの相対峙したイスラーム主義を共に手綱に執る機会を米国主導の列強に与えたと見ることもできる。(脱稿2016年晩夏)。

## 注

- 1 *Bīdārī-ye Eslāmī, Zamīne-ye Tarīkh-e Mo'āsar-e Irān*, Sāl-e Sevvom-e Āmūzesh-e Motavasete-ye Kollīe-ye Reshte-hā, 1392, これは2014年度から改訂とともに教科書「イラン現代史」の最終章として組み込まれた。
- 2 Mūsāvī, S. Hosein, *Bīdārī-ye Eslāmī va Tahavolāt-e Montaqeh*, Markaz-e Pezheheshhā-ye 'Elmī va Moṭāle' āt Estrāzhik-e Khāvarmiyāneh. Tehran. 1392.
- 3 *Bīdārī-ye Eslāmī, Zamīne-ye Tarīkh-e Mo'āsar-e Irān*, *ibid.*, p. 2.
- 4 *ibid.*, p. 24.
- 5 1996年ターリバーンがアフガニスタン全土を支配する以前のアフガーン・ムスリム戦士 (Mojāhedīn-e Afghānī) を指す。
- 6 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 33.
- 7 ヘズボッラーがイスラエル兵2名を捕虜にしたことを冒険主義とサウジは非難し、またエジプトはイスラエルによるガザ攻撃で、ハマースが力を付けることに懸念を示した。Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 35.
- 8 オバマ政権 [2009年1月20日-] 発足時に従来の米国政策を変え、イランとの対話方針を表明。Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 38.
- 9 今日のイランにおける宗教政治学者の一人アフマド・ヴァーエズイー (Baqer al-Olum University, Qom, Iran 理事兼教授) はつぎの旨、イスラーム民主制の理論を論述する。

「自由民主主義と言われるが、自由主義と民主制は、元来性質を異にし、両者間には齟齬がありうる。例えば、民主制の多数決制によって自由主義の基本に反する議決がなされる恐れなどである。そうした事態を避けるべく、自由主義の不変の原則として各個人による幸福 (善) の追求権を憲法で保



証する。イスラーム社会でもこの原理と枠組を援用することで、『イスラーム民主制』の構築が可能である、と。そこで、イスラーム社会にとり不可欠で不可変な特性として、彼は次の諸事項を挙げる。(1)イスラーム法の施行、(2)勸善禁悪に基づく社会的健全性の保持、(3)人間の真の自由実現を可能にする条件（近代西欧の自由は個人の自由を最重視し、各個人の願望にとって阻害要因がないことを自由とみる。これにたいしてイスラームでは、そうした願望を持った自己の制御により、自己浄化するなわち精神的に己れを高め神に近づく；換言すれば現世的世俗的欲望に隷属した状態からの自己解放である。この意味での自由を具現可能にする社会環境）。こうしたイスラーム社会の基本的原則が民主制のいわゆる多数決原理によって侵害されないように憲法で守られたのがイスラーム民主制である」とする（Vaezi, Ahmad, *Shia Political Thought*, Islamic Center of England, 2004）。ハーメネイーはかかる考えから、核交渉合意成立後（2015年10月7日）、米国との関係改善への期待が急激に高まりつつあった時期に釘を刺し『米国との交渉は禁じられる』とのべたと見る解釈もあり得る。

- 10 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 33.
- 11 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, pp. 33-37、執筆は2009年2月。
- 12 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, pp. 43-44.
- 13 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, pp. 44-45.
- 14 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 47. ちなみに、イラクは1990年8月、クウェートに侵攻し占領。国際連合による撤兵決議に応じなかったため、国際連合の決議によって編制された米国中心の多国籍軍が、1991年1月イラクに対して攻撃を開始し、2月末までにクウェート全土を解放した。この湾岸戦争前にラフサンジャーニーはサウジでファハド国王と会談、外交関係を再開させた。このことはGCCとイランとの関係を好転させ、クウェートはサッダーム・フサインを「イ・イ戦争で」支持したことをイランに詫びた。出処、Mason, R., *Foreign policy in Iran and Saudi Arabia – economics and Diplomacy in the Middle East*, I.B. Tauris, 2015, p. 24. なお、サウジとイランの外交関係再開は湾岸戦争後の1991年3月。出処、Yoel Guzansky [ハイファ大学政治学部 & テルアビブ大学 INSS]、*The Arab Gulf States and Reform in the Middle East: Between Iran and the “Arab Spring”*, Palgrave Macmillian, 2015, p. 43.
- 15 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 48.
- 16 宗教的使命として、例えば「イランのシーア派イスラーム学教科書」では、人間は社会的存在ゆえに、単に個人の内面を高め神に近づくのみでなく、これを可能にする外的環境；被抑圧者救済による社会正義も求められる旨を説き、コーランの一節「これ汝ら、何故にアッラーの御ために、また、あの力弱い男や女や子供たちのために戦おうとしないのか（第4章75節）」を引用する（注54引用書：シリーズ22、158頁）。近代国際関係に見られた利害計算性は、かかる宗教要素が新たに加わることで変容が生じていると金森俊樹は近著「バルカン半島地域と大欧州世界」にて鋭く指摘する。中津孝司編著『苦悶する大欧州世界』創成社、2016年、185～6頁。
- 17 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 51.
- 18 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 52.
- 19 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 53.
- 20 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 29.
- 21 伊能武次・土屋一樹 編、『エジプト動乱 — 1.25革命の背景 —』所収、伊能武次著「第一章、未完の革命エジプト — 移行期の政治序説」、アジア経済研究所、2012年12月。p. 35.
- 22 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, p. 31. [執筆は2011.12.13] ただし、この評価はエジプトでその後に展開した、2013年のムルシ政権失脚と状況の変化は踏まえていない。
- 23 Mūsāvī, S. H., *ibid.*, pp. 27-28.

- 24 いわゆる「アラブの春」の変動と、米国の撤兵という状況下で、イランの「イスラームの目覚め」キャンペーンに対抗すべく、「アラブ諸国の国家像として新しいモデル（イスラーム主義者が指導する、資本主義民主制国家）となることをトルコに期待する」動きが見られた。
- 1) Premier of Turkey Takes Rolein Region, [http://www.nytimes.com/2011/09/13/world/middleeast/13egypt.html?\\_r=0](http://www.nytimes.com/2011/09/13/world/middleeast/13egypt.html?_r=0) (20160501閲覧)。
  - 2) Saghafi-Ameri, Nasser, *Iran-Turkey Relations in the light of the Syrian and Iraq Crises*, Institute for Middle East Strategic Studies, 2012.5.20. [http://www.iranreview.org/content/Documents/Iran\\_-\\_Turkey\\_Relations\\_in\\_the\\_Light\\_of\\_the\\_Syrian\\_and\\_Iraq\\_Crises.htm](http://www.iranreview.org/content/Documents/Iran_-_Turkey_Relations_in_the_Light_of_the_Syrian_and_Iraq_Crises.htm) (20160501閲覧)
  - 3) ニューズウィーク誌「『優等生』トルコがアラブ世界のお手本に」  
<http://www.newsweekjapan.jp/stories/world/2011/04/post-2042.php> (20151124)。
- 25 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 17.
- 26 註51参照願う。
- 27 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 18 (2011.11執筆)、ヨルダンなど周辺諸国においてトルコの公正発展党政権が担う役割が、ヨルダンのムスリム同胞団との対話という構図ならば、サウジのそれはシリアならばアル・ヌスラとの対話と解釈しえる。しかし、バハレーンのシーア派系反政府集団との対話は構図的に整合せず疑問符が付く。
- 28 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 57.
- 29 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 58.
- 30 サウジ主導の湾岸諸国はリビアのカダフィに対する NATO による武力行使を、シリアのアサド政権打倒においても再現を図ったとイラン観測筋は示唆する。「リビアは地中海に面して長い海岸線を持ち、ここからヨーロッパに難民が流出していた。これを阻止せんとして NATO が軍事介入したが、これはリビアと他のアラブ諸国との違いとして際立つとともに、人民と政府の亀裂を利用した外国干渉のリビア・モデルとして他の地域・国でも用いられる虞がある。西側の論調では、圧倒的多数国によってたつ国際体制に添わない国々をそうした対象リストに挙げている。バハレーンもイエメンも、リビア人民の要求と大差があるわけでないが、イエメンでは政府と民衆の対話を奨励して米大使公邸を対話の場に提供した。しかし、シリアの場合はアサド政府が改革目的のプロジェクト実施のために対話に反政府勢力を招いても、西側諸国は対話自体に反対し阻止する」と。*Ibid.*, pp. 112-113.
- 31 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 60.
- 32 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 58. ここでのインド併記に疑問の声が専門分析筋からある。
- 33 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 60.
- 34 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 66.
- 35 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 61.
- 36 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 62.
- 37 補足資料としては主として次を参照した。1) Yoel Guzansky [ハイファ大学政治学部 & テルアビブ大学 INSS], *The Arab Gulf States and Reform in the Middle East: Between Iran and the "Arab Spring"*, Palgrave Macmillian, 2015. & 2) 国枝昌樹『報道されない中東の真実——動乱のシリア・アラブ世界の地殻変動』朝日新聞出版、2014年8月。
- 38 1993年から2003年までサウジはイランとの宥和政策に賭けた……との指摘は、中村覚「サウディアラビア・イラン間の安全保障のジレンマ-全方位均衡論の応用から」中東研究、中東調査会、2015年 vol. III, p. 41.
- 39 Guzansky, Y., *ibid.*, p. 57.

- 40 サウジはサッダーム・フサイン後のイラクから、それまでのイラク支援の見返りを期待していた。クウェート解放戦争における対イラク戦の費用、次のイラク戦争の戦費はサウジ、クウェートその他、サウジなど湾岸諸国の分担で賄われていた。にもかかわらず、イラク戦役の果実を手にしたのは、両戦役で如何ほどの支出もないイランだとして、これがサウジの怒りを煽る大きな役割を果たしている、とイラン観測筋は言う。Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 167.
- 41 Guzansky, Y., *ibid.*, p. 50.
- 42 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 165.
- 43 米国ブッシュ政権は中東諸国を穏健派と過激派に別けた。エジプト、サウジ、ヨルダンが穏健派に、シリア、イラン、レバノン・パレスチナの闘争的諸組織（ヘズボラー、ハマース運動、パレスチナにおけるイスラーム聖戦）は過激派である。穏健派の2005年来の任務は、過激派の手綱を採り、米国による直接的介入の合法的な口実作り、オスロ合意による和平環境作りであったとイラン観測筋。Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 34.
- 44 国枝昌樹、上掲書53頁 2014年8月。
- 45 国枝昌樹、上掲書60-61頁。
- 46 サウジは国内シーア派教徒がイランから支援を受け反政府活動しているとして抑圧しながら、他方でアサド政権から差別・抑圧されているシリア市民への支援という大義名分でシリア反政府勢力への支援を行うというジレンマを持つ。しかしそれがイランを抑える効果を持つ限り、そこに矛盾はないとサウジ王族は見ていた。Guzansky, *ibid.*, p. 47.
- 47 イラン元外交官は、「反アサド政権の諸国はシリア国民の自由と民主主義を支援すると謳ったが、その実態はイランの台頭への懸念がより強いように見えた」と記している。Saghafi Ameri, Nasser, *The middle East after U.S. Troops' Withdrawal from Iraq*.  
[http://www.iranreview.org/content/Documents/The\\_Middle\\_East\\_after\\_U\\_S\\_Troops'\\_Withdrawal\\_from\\_Iraq.htm](http://www.iranreview.org/content/Documents/The_Middle_East_after_U_S_Troops'_Withdrawal_from_Iraq.htm) (20151126閲覧)。また、既述のイスラエル研究者は次の様に言う「アラブの春の騒擾下のサウジによるアラブ諸国への介入は、国により異なり多様であるが、シリアとレバノンにおいては反イラン勢力への支援で一貫していた」。Guzansky, pp. 51-53.
- 48 中東調査会 中東かわら版 No. 169. 「別冊中東研究、中東各国動向」2013年、p. 319.
- 49 *You Can't Understand ISIS If You Don't Know the History of Wahhabism in Saudi Arabia*,  
[http://www.huffingtonpost.com/alastair-crooke/isis-wahhabism-saudi-arabia\\_b\\_5717157.html](http://www.huffingtonpost.com/alastair-crooke/isis-wahhabism-saudi-arabia_b_5717157.html)
- 50 Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 168.
- 51 **サラフィー主義**集団は、今日多岐にわたるが、共通する信条は神の唯一性を厳格に説き、啓示（コーラン）と預言者のスンナを字面通りに奉じて、人間理性の役割や論理、願望を厳しく斥ける点にある。ムウタズィラ神学の理性主義に反撥し、コーランとスンナに依拠したハンバリー法学派の流れを汲んだイブン・タイミーヤ（1328没）が、預言者の時代の先人達（サラフ）に範を求めるサラフィー主義を整え、またシーア派などを強く批判した。この思想はイブン・アブドゥルワッハーブとサウジアとの盟約に基づく政治的権力と資金の裏付けを得て具現化と影響力拡張の機会を掴み、今日、サラフィー主義をワッハーブ主義が自称することもあって同一視されるほどとなった。が、アフガーニー（1897没）やムハンマド・アブドゥ（1905没）による「イスラームの団結」と「イスラーム初期への回帰」を説く別のサラフィー主義があり、こちらはイブン・タイミーヤやワッハーブ主義の「旧サラフィー主義」に対して「新サラフィー主義」と呼ばれた。「旧」はサラフ達の道からの逸脱が、イスラーム社会の分裂や弱体化の原因と見なしたのに対して、「新」の言うイスラーム初期への回帰とは力の蘇生を指し、理性や正義、[科学的]学識志向の原理に従う事がイスラーム社会に変化と進歩を

もたらずと説いた。また、「旧」とは対照的に、スンナ派とシーア派の対立でなく「イスラームの団結」を説いた。しかし、アブドゥを継いだラシード・リダーは、ワッハーブ主義布教者だったとの評（モタッハリー）もあるほどに、「新」よりも「旧」からの影響が強く新サラフィー主義を変質させる端緒を作った。

今日のサラフィー主義は3~4のグループに分類されている。1) 政治的サラフィー（ムスリム同胞団など）、2) 伝統的サラフィー主義（メッカ時代の預言者に範をとって政治もジハードからも身を引く。サウジ宮廷に侍るサラフィー主義とか *purist* と称される）、3) ジハード・サラフィー主義、（サイイド・クトブやオサマ・ビン・ラーデンがその代表。西欧諸政府とその社会を多神崇拝と背信の範疇に入れ、ジハードの対象とする。以上の3つにイランでは次の4つめを加える場合がある）4) **タクフィール**・サラフィー主義。（この派はジハード・サラフィー主義の攻撃対象範疇をさらに拡大しイスラーム内のシーア派などの政府と信徒も含める。米軍のイラク進攻後、この派がイラクに流入、シリア騒乱後は両地域でこの派がシーア派との闘いを主眼に、自爆テロを駆使し台頭した）。Mostfā, H, *Dā'esh, Zīr-e Sākht-e hā-ye Ma'rrefatī va Sākhtārī, Mo'assese-ye Farhangī va Honarī-ye Āftāb-e Khord*, Tehran, 1394, pp. 1-34., Q. Wiktorowicz, *Anatomy of the Salafī Movement*, Journal Studies in Conflict & Terroism, Vol.29, pp. 207-239.

- 52 「ムスリムが信仰を換えるまでユダヤ教徒、キリスト教徒たちは満足としない」の論旨。
- 53 Q. Wiktorowicz, *Ibid.*, pp. 218-19. アラブの春を「イスラームの目覚めの波」と最初に公言したのはハーメネーイ（2011年春分）。Mūsāvi, S. H., *ibid.*, p. 159.
- 54 拙訳「イランのシーア派イスラーム学教科書 — イラン高校国定宗教教科書」、明石書店、世界の教科書シリーズ22、2008年、149頁。一部の訳を加筆修正。完全さ、すなわち神の謂いに関しては、同シリーズ36、2012年、195頁。
- 55 十二イマーム・シーア派はムウタズィラ神学から、コーランの言葉の暫定説のほか、人間の自由意志と最後の審判における神の正義説、つまり神の予定説否定の立場を引き継ぎ、これらの点でスンナ派と対照的立場にある。Heinz Halm, *Shi'ism*, 2-nd edition, Edinburgh Univ. Press Ltd, Edinburgh, 2004, pp. 49-50.
- 56 長澤栄治著「エジプト革命 — アラブ世界変動の行方」平凡社新書、pp. 244-5は示唆に富む。
- 57 最高指導者ハーメネーイの言（2011年9月17日、「イスラームの目覚め国際会議」における演説からの抜粋要約）。以下は本文での要約部分の続き。

「こうした運動は、欧米やシオニスト体制の肯んじるところではないが、運動の担い手は国民であることに注意を喚起せねばならない。覇権主義超大国 [米国] の傀儡であるローカルな支配者からの解放は民衆自身の手による。したがって民衆が自らの支配者を選び、……それぞれ各国の状況の応じた『イスラーム的社会』を構築するイスラーム的民主制が必要である」と。

<http://farsi.khamenei.ir/print-content?id=17269> (20160527閲覧)

[http://japanese.khamenei.ir/index.php?option=com\\_content&task=view&id=657&Itemid=2](http://japanese.khamenei.ir/index.php?option=com_content&task=view&id=657&Itemid=2) (同上)

- 58 2015年7月、イラン核開発交渉が合意に至り、同年10月末シリア問題を巡る外相会議が開催されイランも出席した。シリア動乱を巡るかかる国際会議であるが、それまではアサド政権の退陣を前提とし、これに拘泥するサウジによって会議から事実上閉め出された形でイランは参加していなかった。アサド政権の退陣如何はシリア国民自身の決める問題であって他国の決めることではないとするのがイランの主張だったためである。しかし核交渉でイランとの交渉に実績を積んだ米国の調整により、会議の前提であったアサド政権退陣条件を緩和したことがイランの会議参加を可能にした。シリア国民の悲惨な状況と欧州への難民問題の深刻化に対する欧米の国際世論の動向もこれを後押しした。